

雑色人郡司と十世紀以降の郡司制度（下）

森 公 章

三 郡司制度の行方

前二章では十世紀の郡司のあり方として雑色人郡司の特色や国郡務運営の方法などについて検討を試みた。一々の任命者の分析は行わなかったが、「はじめに」で触れたように、雑色人郡司の中には譜第郡司の系譜を引くと思われる者も多く、また第一章で言及した正員郡司と雑色人郡司を兼帯する者に譜第郡領氏族の例が存する。

では、十世紀にも存続していた譜第郡司はどのような展開を見せるのであろうか。十一世紀以降の一員郡司制の中では如何であらうか。また雑色人郡司の消滅と一員郡司制の成立過程、一員郡司の役割とその位置づけ、そして郡司のあり方の変化の有無はどうであらうか。本章では、十一世紀以降の郡司の諸相に考察を加え、これらの問題に言及するとともに、郡司制度の変容やその行方を展望してみたいと思う。

1 譜第郡司の動向

譜第郡司の行方を考えるにあたり、まず郡司表の検討の中から郡司任命者の動向の特色を把握することから始めたい。⁽¹⁷⁾ 十一〜十二世紀の郡司

任命者の事例は多くないが、その氏姓の分析からこの時期の郡司氏族のあり方を整理する。

十一世紀以降の郡司氏族の動向を概観すると、次の通りである。

〔譜第郡領氏族の存続〕（＊は譜第郡領氏族以外の者も見える郡）

山城国葛野郡（秦忌寸）、伊賀国名張郡＊（伊賀朝臣）、伊勢国三重郡（中臣伊勢宿祢）・度会郡（新家宿祢）、志摩国答志郡（嶋直）、駿河国富士郡（和迩部宿祢）、甲斐国山梨郡（伴直）、越中国砺波郡（利波臣）、但馬国朝来郡＊（日下部宿祢）、播磨国飾磨郡（播磨直）・赤穂郡（秦造）、安芸国高田郡＊（凡直〔宿祢〕）、紀伊国名草郡＊（紀宿祢）、土佐国幡多郡＊（秦）

〔譜第郡領氏族以外の者〕（一）内は推定譜第郡領氏族。氏名の＊印は十世紀または十一世紀以降にも郡司としての所見例があることを示す）

山城国乙訓郡〔？〕（凡）・紀伊郡〔秦忌寸〕（布勢、上勝）、大和国添上郡〔十世紀・郡＊〕（源）・平群郡〔平群＊、額田部＊〕（宇自可、年、多治）・広瀬郡〔？〕（当麻）・葛上郡〔？〕（源）・宇智郡〔内〕（藤原）・城上郡〔？〕（薦口）・高市郡〔高市県主（連）〕（若狭、但

波〔東漢直氏系カ〕・十市郡〔忍海連〕〔日置〕・山辺郡〔？〕〔山辺
※、依羅、多米、上道〕、伊賀国名張郡〔伊賀朝臣※〕〔小川、小野、
鳥取、猪、長谷、丈部、紀、源、藤原〕、伊勢国多氣郡〔麻統連、竹
連※〕〔尾乃〕、尾張国丹波郡〔海宿祢〕〔棕橋宿祢〕、上総国相馬郡
〔？〕〔平〕、近江国愛智郡〔依知秦公〕〔中原〕・高島郡〔角山君〕
〔信濃公〔通称カ〕〕、美濃国安八郡〔守部〕〔宮道朝臣、源〕・厚見
郡〔各務勝〕〔政則王〕・山県郡〔均田勝〕〔桑名〕・可児郡〔？〕〔伴
壬生、秦〕、若狭国三方郡〔？〕〔平〕、但馬国朝来郡〔日下部※〕
〔全見〕、安芸国高田郡〔凡直〔宿祢〕※〕〔藤原、源〕、紀伊国那賀
郡〔日置首、長我孫〔公〕〕〔秦〕・名草郡〔紀宿祢※〕〔秦、黒部〕、
阿波国三好郡〔？〕〔播磨、忌部、佐伯、宗我部〕、讃岐国多度郡〔佐
伯直〕〔綾〕、伊予国野間郡〔？〕〔中原朝臣〕、土佐国幡多郡〔秦
※〕〔惟宗朝臣、八木〕、筑前国怡土郡〔？〕〔高橋、藤原〕・嘉麻
郡〔？〕〔王〕・夜須郡〔？〕〔安倍〕、豊後国日田郡〔日下部連〕〔大
蔵〕、肥前国松浦郡〔？〕〔佐伯〕・杵島郡〔？〕〔藤原、清原〕、肥後
国飽田郡〔建部君〕〔清原〕、大隅国贈嶺郡〔曾乃君〕〔藤原〕、薩摩
国阿多郡〔薩摩君〕〔平〕

※八、九世紀の郡司例がないために譜第郡領氏族を不明とした場合も
多い。山辺郡の場合は山辺県主を譜第郡領氏族と見れば、この山辺
はその系譜を引くものかもしれないが、カバネが不詳であり、とり
あえずここに記した。

先述のように、十世紀代以前と比べて全体の事例数が少ないという制約
はあるが、譜第郡領氏族の存続が確認できる郡は数が限られており、従

来の譜第郡領あるいは主政帳クラス以外の氏姓の者、また源平藤橘の四
姓に代表される中央系の氏姓の者が多いという傾向が看取される。勿論、
在地豪族が源平藤橘などの中央系の姓に改称する例もある〔伊賀国名張
郡の郡司丈部氏↓源姓、越中国砺波郡の郡司利波臣↓藤原姓、安芸国の
田所惣大判官代三善氏↓藤原姓、紀伊国造紀直〔宿祢〕↓紀朝臣など。
婚姻関係や国司との関係によると言われる〕ので、在地系、中央系を簡
単には決められないという点も考慮しておかねばならないが、伝統的な
氏姓の改称にはやはりそれなりの事情があったと思われるから、十一世
紀以降の郡司の動向を窺わせる手がかりになると評価したい。

では、譜第郡司の行方は如何であろうか。ここでは氏族全体の動静が
わかる材料として、まず系図史料を取り上げてみたいと思う。系図史料
は充分な考証を経たおらず、信憑性に欠けるものが多く、また任命年次
等が不明な場合も頻繁であるが、参考例とすべきものも含めて掲げると、
表2のようになる。表2によると、十世紀代における判官代、「所」へ
の出仕から、兄部・執官・一庁官など判官人の上首へと発展する例が
あり、国衙の在庁官人への転身が目につく。この点は別稿で指摘した、
国書生、判官代には十世紀以降郡領氏族出身者が増大するという傾向と
も合致している。また先に近江国の例で言及したように、表2では国衙
軍制を支える役職に就いている場合が散見していることが知られる。し
たがって譜第郡司の行方としては、国衙への転身、郡務の国務への吸収
というよりは、自らが国衙機構を担う存在として活動の場を求めるとい
う方向が考えられるのではあるまいか。ちなみに、前掲史料aでは国衙
への転身後も譜第郡司氏族として郡務にも影響力を保持しており、譜第

表2 譜第郡司氏族の転身例

国名	郡名	氏族名	年次	転身	出典
山城	乙訓	栗田朝臣	正暦2	勘済使（国使）	平421
			長保4・2・19	判官代兼行事	
			11世紀頃	税所	*
伊勢	多気	磯部直	?	検非違使、判官代、政所兄部	*
参河	幡豆	大伴	?	地名+介	伴氏系図
	八名			追捕使	
遠江	城飼	土形君※	10世紀前半	判官代	土方家系図
			10世紀後半	押領使	
駒河	廬原	廬原公	10世紀前半	追捕使	*
		（朝臣）	10世紀後半		
	富士	和迹部臣※	11世紀頃	判官代、公文所	富士大宮司系図
伊豆	田方	伊豆国造伊豆直	11世紀頃	押領使、在庁	伊豆国造伊豆宿称系図
下総	印波	大伴直※	10世紀	判官代	*
		（丈部直）	中葉頃		
近江	栗太	建部臣（朝臣）	10世紀前半	判官代	*
越前	敦賀	角鹿直	?	健児所判官代、判官代、	*
				押領使	
越中	砺波	利波臣※	11世紀	押領使	越中石黒系図
越後	蒲原	春日山君※		判官代、政所	*
	古志				
但馬	朝来	日下部宿称	10世紀中葉	健児所判官代、執官	多遲摩国造日下部
				判官代	宿称家譜
			10世紀頃	国検非違使	田道間国造日下部
					足尼家譜大綱
讃岐	阿野	綾公（朝臣）	10世紀頃	執官兼判官代、押領使	綾氏系図、*
				在庁、案主所一庁官	
筑前	宗像	宗形朝臣	10世紀中葉	権守執官、判官代	*
豊後	日田	日下部連・君	長元9・2・28	大宰府の検非違使	八幡宇佐宮御領大鏡
肥後	阿蘇	宇治部君※	10世紀後半	税所公文	*
			～11世紀		
	益城	日奉部直※	10世紀後半	判官代、政所	*

◎「転身」は系図等にそのような注記が出てくることを示し、「氏族名」の項の※はそれ以後も郡司の注記が見えることを示す。「出典」の項の*は『古代氏族系普集成』（古代氏族研究会、1986年）に依拠したもので、いずれも参考例に留めるべきものと考えている。なお、豊後国日田郡の日下部氏については、新川登亀男「豊国氏の歴史と文化」（『古代王権と交流』8、名著出版、1995年）も参照。

郡司の勢威は残ったものと推定される。表2でも転身例出現以降も郡司の役割を担う例が存し、単線的ではない譜第郡司氏族の動向を窺わせるものと言えよう。

e 『三代実録』元慶三年十月二十三日条

河内国高安郡人常陸權少目從八位上常澄宿祢秋雄・權史生從八位上常澄宿祢秋常、河内国檢非違使從七位下八戸史野守、安芸医師從八位上常澄宿祢宗吉、河内国高安郡少領從七位下常澄宿祢宗雄、式部位子從六位上常澄宿祢秋原等六人、賜姓高安宿祢。秋雄等自言、先祖後漢光武皇帝、孝章皇帝之後也。裔孫高安公陽倍、天万豐日天皇御世立高安郡。陽倍二字、意与八戸両字語相渉、仍後賜八戸史姓。末孫正六位上八戸史貞川、承和三年改八戸史、賜常澄宿祢。望請改八戸・常澄両方姓、復本姓高安也。

f 『三代実録』元慶五年五月九日条

河内国高安郡人右近衛無位常澄宿祢藤枝、右近衛無位常澄宿祢常主、位子無位常澄宿祢季道・無位八戸史善賜姓高安宿祢。去元慶三年藤枝等父並改本姓、賜高安宿祢。藤枝等脱漏不載官符、故追賜之。

g 『扶桑略記』寛平八年条所引「善家秘記」

余寛平五年為備中介。時有賀夜郡人賀陽良藤者、頗有貨殖、以錢為備前少目、至于寛平八年秩罷居住本郷葦守。(中略)良藤兄大領豐仲、弟統領豐蔭・吉備津彦神宮祢宜豐恒、及良藤男左兵衛志忠貞等、皆豪富之人也。(下略)

h 『一乗妙行悉地菩薩性空上人伝』「華山太上法皇御幸当州書写山事」又長保四年壬寅三月五日辛丑、華山法皇從御船仙駕、於飾磨津湊、即指

御使、大掾小野朝臣道忠之許召遣御馬之處、進無鞍置馬二疋、只付御使自身不參、仍有不快御氣色。(中略)其後大掾播磨宿祢延昌許同指御使、召遣御馬等、即具御鞍等令進御馬十四匹、津頭之近辺郡司等令進馬四匹。(中略)六日壬寅、弥勒寺留御坐給。仍大掾延昌宿祢語付当郡司播磨頼成令供朝御饌。事俄而雖不豐弁備之作懇志自露也。其日夕膳奉仕大掾延昌宿祢、雖臨黃昏美麗青旦也。七日癸卯(中略)其日供御々膳宣曰、付檢非違所大判官代播磨輔調備之獻。美好為宗、酒食之礼飽滿為本也。(中略)申刻許磨飾津湊仙駕還着給、於御船乘御。其日夕御膳之事、兼付少掾播磨延行奉仕之間、調備豐贍也。(下略)

なお、譜第郡司氏族の単線的でない動向として、e・hのような事例に留意したい。e・fは孝徳朝の立評以来河内国高安郡の郡領に任用されてきた八戸史一族の構成を示し、八戸史は譜第郡領だけでなく、中央下級官人や任用国司として幅広く活躍しており、また河内国の国檢非違使に就くなど、国衙での地歩も得ていたことが窺われる。そして、彼らはいずれも高安郡を本貫とする人々であって、郡領の地位を確保すると同時に、多方面への展開を可能にする準備を整えていたのである。このような八戸史のあり方は、郡領と中央官人の二面性を持つ畿内中小豪族たる畿内郡司のみに限定されるものではない。e・fとはやや年代が下るが、gの備中国賀夜郡の郡領氏族賀陽氏の場合も同様の一族構成が看取できる。良藤の備前少目は錢で入手した地位と記されており、良藤・忠貞父子は賀夜郡に居住していたようであるから、ともに九世紀末の官符に見える名目のみの帯官であったかもしれないが、中央官人や任用国司の地位を有している。そして、大領、吉備津神社の祢宜という政・

祭方面で在地を支配する地位、統領という国衙軍制を支える役割などと合せて、一族で様々な展開の可能性と在地支配の保持を達成することができたのではないかと考えられる。^⑧ またhは年代が十一世紀初とさらに下るが、播磨国飾磨郡の譜第郡領氏族播磨直（宿祢）氏が飾磨郡の郡司に加え、大掾・少掾などの任为国司、檢非違所判官代Ⅱ国衙軍制を担う在庁官人の「所」への出仕の如く、国衙に大きく進出していた様子が窺えよう。^⑨ hでは大掾小野道忠は華山法皇に不十分な接待しかできなかったのに対して、大掾播磨延昌は同族の人々の支援を得ながら、充分な対応を行っており、国郡行政の運営に際して播磨氏の協力が不可欠のものとなっている点が看取でき、興味深い史料である。

以上のような、必ずしも郡司だけに固執せず、様々な方法で自己の支配安定を企図しようとする譜第郡司の姿は、その他、十世紀の郡司任用の儀式の際に呈される国解の中の郡司候補者の経歴にも窺うことができる。^⑩ 『類聚符宣抄』第七に見える事例の中では、α天徳三年四月五日撰津国司解の住吉郡大領津守宿祢茂連（前鎮守府軍曹正六位上）、β応和三年八月一日尾張国司解の海部郡大領尾張宿祢是種（散位正六位上）、γ康保二年二月十七日美濃国司解の各務郡大領各務勝利宗（前出羽権大目正六位上）などが抽出され、βには「檢故実、諸国主典已上散位輩、越次一度補任大領之職、蹤跡已存」とあるので、βも任用国司の前歴を有する者であつたと考えられる。γでは「譜第之輩、拜任諸国主典已上之後、依国解文、越次補任大領之例不可勝計」と記されており、α・γはいずれも譜第郡領氏族の者の任用例であるから、β・γに指摘されているように、本来郡司を継承すべき譜第氏族の人々が、郡司のみを一義

的な目標とせず、任用国司等の国衙での地位や国務の経験を視野に入れて、様々な方面への展開を試みていたことが知られよう。譜第郡司のこうして方面への展開は、『三代格』卷七寛平五年十一月二十一日官符

「応停止諸国擬任郡司遷拜他色事」に「而称任諸国之吏、号拜親王家司、不勤公事、專利私門」とあり、郡司忌避の一手段として用いられていたことがわかり、実例としては貞観元年十二月二十五日近江国依智莊檢田帳に愛智郡の譜第郡領氏族依知秦公氏の者で「田刀前伊勢宰依知秦公安雄」、「遠江掾依知秦公乙長」といった姿が見える（平一二八）ことが指摘できる。このような九世紀後半のあり方から、第一章で検討した十世紀の雑色人郡司では任用国司等の兼帯例も散見し、任用国司単独にせよ、兼帯にせよ、譜第郡司氏族の者がこの方面への展開にも目を向けていたこと、またβ・γに記されているような、任用国司↓郡領という、郡領就任者の経歴の多様性を示す事例が増加していったことなどが推定されるのである。

以上を要するに、八、九世紀では主流であつたと考えられる白丁↓郡領、即ち譜第郡司氏族が郡領の地位のみに固執する姿は、九世紀後半の郡司忌避の風潮、その後の十世紀の雑色人郡司による兼帯例の一般化などにより大きく修正され、任用国司等の他の官職を経た後に郡領に就任するという道も可能になった。また十世紀には譜第郡司の国衙への転身例も見られ、譜第郡司氏族は郡司の地位だけでなく、一族で様々な在地支配に有効な分野に進出して、権力・権威の保持に努めたのである。したがって譜第郡司の在地における地位は総体的には大きな変動はなく、彼らの多様な展開により、むしろ在地支配における郡司の地位が相対化

したと見ることはできるのであるまいか。ちなみに律令制下の郡が東・西・南・北などに分割された例は十世紀から見え、後の郡・郷・保といった中世的国郡制支配の基礎となる単位が成立し始めており、郡司の支配する範囲にも変化が現れている。⁴⁴ また郡衙遺跡は全国的に十世紀代に消滅するという現象が明らかになっており、⁴⁵ こうした事柄も譜第郡司の転身例などの動向や郡司の地位の相対化と関連すると考えてみたい。

そこで、十一世紀以降のあり方については次節で述べることにし、本節の最後に十世紀から十一世紀への変化と関係しそうな事象を整理して、郡司制の行方を考える手がかりとしたい。まず既に別に触れたように、⁴⁶ 十世紀初より関郡司職分田が増加していたこと、中には国内の推定郡司職分田数に比して五〇%以上の関郡司職分田が存在した国も多いことに注意される。こうした事象は単に一時的に関郡司職分田が生じ、新しい郡司の任用によってその数が変化するという事態ではなく、むしろ関郡司職分田が恒常的に存在する状況、即ち郡司職分田の有名無実化、正員郡司の就任例の減少を物語るのである。但し、先述のように、十世紀以降でも雑色人郡司と大・少領を兼帯する例は散見し、また『類聚符宣抄』などにも郡領の任用例は存している。一方、『平安遺文』等により郡判の署名の顔ぶれを瞥見すると、十世紀代には主政帳の署名が見えなくなるのがわかり、正員郡司任用例減少の傾向の中では、特に主政帳の消滅が大きかったのではないかと考えたい。そして、十世紀後半く十一世紀頃の雑色人郡司の名称の消滅と郡司の一員化の現象である。「はじめに」等で言及したように、郡司あるいは大領の名称で呼ばれる一員郡司制が十一世紀には成立するが、その動向は十世紀後半から見られる。

例えば大和国添上郡では、天曆八年五月八日の郡判の惣行事・国目代の署名(平二六八)を最後に、天元三年二月七日の郡判以降(平三一七)は惣行事あるいは郡司と称する者一名のみの署名となっており(平三二二・三二六・三三一・三四九・三六一・三九八・四二二・四五七・一五三〇・一五三一)、郡司の一員化が進展している。その他、十世紀代の事例としては、大和国平群郡(平三〇八・三五二・一四六九)、宇智郡(平三二一・三三三)、高市郡(平四五六三)など、概ね天曆年間以降には一員化が進んでいることがわかる。一方で、この時期は近国の伊賀国などでは依然複数の郡司の署名が見られ(平二七一・二七八・三〇四)、伊賀国では十一世紀に入ってから一員郡司の例が現れる(平五〇四)ので、畿内、特に大和国では逸早く一員郡司が登場したと考えられる。但し、その一員郡司の名称は、雑色人郡司の名称の一つが残存しているもので、一員郡司の出現時期の相違と合せて、一員郡司化が全国一律の制度として定められたものではなく、徐々に郡司の変質が進行していった結果到達したという事情を窺わせるものである。主政帳の郡判署名からの消滅、郡郷制改変による郡司の支配する範囲の変化や郷別専当郡司の各支配範囲での權威確立などが一員郡司制成立に関わる事象であり、ここではこれらが十世紀く十一世紀に進行していたことを指摘し、次節を改めて、十一世紀以降の郡司のあり方としての一員郡司制の様相を検討することにした。

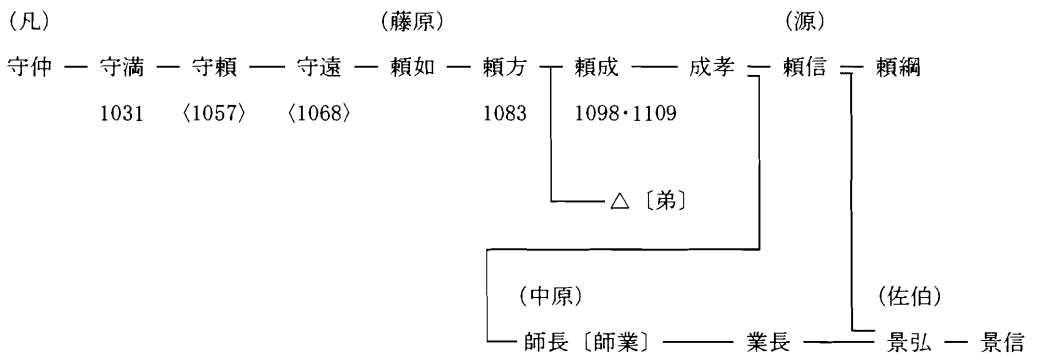
2 一員郡司制の成立

一員郡司制とは、十一世紀以降、郡司はそれまでの郡判への複数署名や様々な名称を有する雑色人郡司から単に郡司あるいは大領と称する一員のみとなり、郡司は各郡に一人という中世的国郡支配への移行を示す時期の郡司制度を指す。前節で触れたように、郡司一員化は早いところでは十世紀後半より現れ、時期は地域によって異なり、また名称も使系などの雑色人郡司の名称が一員郡司の名称として残る場合があるが、全国的な傾向として、概ね十一世紀頃には一員郡司制が成立して行くと見てよい。

この一員郡司制は全国一律に制度として定められたものではなく、郡司制の展開の結果成立したという色彩が濃い。そこで、一員郡司の役割、位置づけやその成立の背景などを知るには、具体的事例に基づいて帰納的に考察するしかないと思う。以下、こうした方法によって、一員郡司制のあり方を検討したいと考える。

まず十一〜十二世紀の郡司任用状況が最もよくわかる郡として、安芸国高田郡の例を掲げて、一員郡司制下の郡司をめぐる諸問題を考える手がかりとする。高田郡司の動向が判明するのは、厳島文書によって郡司藤原氏の所領集積と伝領の様子を復原できるためであって、高田郡司藤原氏のあり方はこの時期の郡司の存在形態を考察する上で従来からも注目されてきた。しかし、近年厳島文書をめぐる史料批判が行われ、偽文書の弁別が試みられ、また郡司の推移や郷司との関係についても新しい見解が示されているので、ここではそれらの成果に学びつつ、私見を整理することにした。高田郡司の任用状況と関係文書は表3、郡司および所領相承の次第は図2の通りである。

図2 安芸国高田郡司および所領相承次第



◎数字は郡司就任年次（西暦）、〈 〉は初見年次。（ ）内は各系列の氏姓を記した。

表3 安芸国高田郡の郡司と関係文書

官職名等	人名	年月日	出典	偽文書の弁別			備考
				Y	A	N	
(前大領) 散位 大領・大掾	藤原朝臣守仲 藤原 守満	長元4・6・3	平4614*	A	×	×	三田郷 (M)・別符重行 (S) の名主とともに大領職を譲与
郡司・散位	藤原 守満	永承3・7・2	平622*	A	×	×	M・Sを嫡男守頼に譲与
郡司・惣判官代	藤原朝臣頼方	天喜1・2・5	平699	B			郡司補任の序宣
郡司	凡	天喜4・3・10	平769				売券の郡判
郡司・散位	藤原 守頼	天喜5・3・10	平854*	A	×	×	M・Sを嫡男守遠に譲与
郷司・散位	藤原朝臣	治暦2・3・2	平1001				三田郷の郷司
郡司・散位	藤原 守遠	治暦4・3・10	平1031*	A	×	×	M・Sを嫡男頼方に譲与
郷司・大掾	藤原 頼方	延久4・9・10	平1084*	A			三田郷の郷司補任の国符
権大介	凡宿称※	延久6・8・10	平1049				売券の郡判
			徴古7 新出34				
散位	藤原朝臣	承保2・8・10	徴古9				三田郷内の土地集積
郷司・散位	藤原朝臣	承保3・2・10	平1269				風早郷内の土地集積
郡司・散位	藤原 頼方	承保4・12・30	徴古12		×		M・Sを嫡男頼成に譲与
郷司	藤原 頼方	承暦2・9・2	平1150	B		×	三田・風早両郷の郷司補任の序宣
・惣大判官代							
惣大判官代	藤原朝臣頼方	承暦2・10・3	平1153	B		×	三田・風早両郷を嫡子頼成に譲与
散位	藤原朝臣頼成						
大領・従五下	藤原朝臣頼方	永保3・6・7	平1200*	A			3・10大領補任の旨の官符
散位	藤原朝臣	応徳1・2	徴古18				三田郷内の土地集積
郡司・散位	藤原朝臣頼方	応徳2・2・16	平1229*	A			大領補任の国符
郡司・散位	藤原 頼方	応徳2・3・16	平1230	B			三田郷の先祖相伝所領田畠を立券
郡司・散位	藤原 頼方	応徳2・3・16	平1231・ 補277	B			風早郷の先祖相伝所領田畠を立券
前郡司	頼如						「不治第一」と非難される
郡司		応徳2・10・5	徴古25				三田郷の土地集積
散位	藤原朝臣	寛治1・10・1	徴古31				三田郷の土地集積
郡司・散位	藤原朝臣頼成	嘉保2・8・15	平1348*	A			郡内7郷の領畠の相伝認可を要求
郡司・散位	藤原朝臣頼成	嘉保3・6	平1357*	A			郡司補任の序宣
郡司・散位	藤原朝臣頼成	嘉保3・12・26	平1366*	A		×	郡司補任の序宣、「三田風早麻原甲立并四箇郷」と見える
郷司・散位	藤原朝臣頼成	永長2・3・5	平1370*	A		×	栗屋・船木両郷司補任の序宣
大領・散位 ・従五下	藤原朝臣頼成	承德2・2・20	平1390*	A			承德1・12・18大領補任の旨の官符
郡司	藤原朝臣	承德2・2・26	徴古55				三田郷の土地集積
郡司・散位	藤原朝臣頼成	承德2・3・10	平補290				Mを嫡男成孝に譲与
郡司	藤原朝臣	承德2・3・28	平1393				三田郷の土地集積
郡司		長治3・12・9	徴古61				書生丹治近恒が「郡司所領」により高田・安南両郡の券文を申渡

大領・従五下	藤原朝臣頼成	天仁2・4・30	平1704*	A			2・5大領補任の旨の官符 (重任)
散位	藤原朝臣	天仁3・3・10	平1718	B	×		三田・風早両郷を成孝に 譲与
散位	藤原朝臣成孝						
散位	藤原 頼成	永久2・3・10	平1803*	A			Mを嫡男成孝に譲与
郷司	藤原朝臣	永久4・10	平1863				風早郷内の土地集積
郷司・散位	藤原朝臣	大治2・3	平2103・ 新出15				風早郷内の先祖相伝 所領を立券
郷司・散位	藤原 成孝	保延5・1	徴古69*		×		三田郷司補任の留守 所下文
散位	藤原朝臣成孝	保延5・6	平2410	A			下司職を保持して、相伝 所領を中原師長に譲渡 芋糸注文を提出
散位	藤原朝臣	仁平3・12	平2791・ 新出15				
散位	源 頼信	仁安2・6・15	新出40	C			風早郷内の土地を厳島 神社に寄進
散位	源 頼信	仁安2・6・15	平3426	C			三田郷内の土地を厳島 神社に寄進
地頭	佐伯朝臣景弘	安元2・7	平3772		×	×	中原師長の寄文状を受け、 高田郡内7箇郷の地頭補 任の庁宣
郷司・散位	平朝臣景弘	治承3・11・2	平3888		×		栗屋郷司補任を伝える 留守所下文
郷司地頭・散位	佐伯朝臣景弘	治承3・11	平3889		×	×	三田郷司地頭等職補任の 庁宣
郷司地頭・散位	佐伯朝臣景弘	治承3・11	平3890		×	×	同上の留守所下文
地頭・散位	佐伯朝臣景弘	治承4・8・27	平3920			?	栗屋郷地頭職補任の庁宣
地頭・散位	佐伯朝臣景弘	治承4・8・27	平3921				三田郷地頭職補任の庁宣
地頭・散位	佐伯朝臣景弘	治承4・9・6	平3923				同上の留守所下文
	源頼 綱	治承4・9・7	平補132				三田・栗屋郷の万雑公事を 頼信以来勤仕の旨を景弘に 申上
郷司・散位	佐伯朝臣景弘	治承4・10	平3927			?	栗屋郷司職補任の庁宣
郷司・散位	佐伯朝臣景弘	治承4・11・11	平3936				同上の留守所下文
郷司・散位	佐伯朝臣景弘	治承4・10	平3928				三田郷司職補任の庁宣
郷司・散位	佐伯朝臣景弘	治承4・11・3	平3933				同上の在庁下文
安芸守・従四下	佐伯朝臣景弘	寿永1・3	平4026				高田郡内7箇郷の相伝私領 を嫡男景信に譲与
	佐伯朝臣景信						

◎・出典の*は平2410の譲与・郡司補任の文書一覧に見えることを示す。徴古は『広島県史』古代中世資料編V(1980年)の「安芸国徴古雑抄」の番号による。新出は「新出厳島文書」で、『平安遺文』と異同のあるもののみ、番号を掲げた。

・偽文書の弁別：Y＝山田渉氏の区分(A；藤原成孝→中原師長→同業長→佐伯景弘と伝来して厳島文書に含まれるようになった文書群で、平2410とすべて一致し、一応信用し得る、B；成孝→源頼信→佐伯景弘と伝来したもので、郡司補任の事実関係と反するものが含まれており、内容・書式等からも偽文書と考えられる、C；景弘もしくは厳島神社が直後に文書の本来の授受に関係していたもの)。A＝ARNESEN、N＝錦織氏が偽文書とするものに×印(？は偽文書の可能性もあるもの)。

・※「凡宿祢」は錦(9)氏註聞a論文89頁註(13)に、「『徴古雑抄』では「権大介」の下に「宿」の字と「禰」の偏の「示」らしきものが読める」と記されていることによった。

①郡司任用の官符には「大領」に補任すると記されており、大領が正式な名称であった。但し、大領に任じられた人物が単に郡司と称したり、前任者を指して「前郡司」と表記する場合があるので、この郡司Ⅱ大領であって、郡司の一員化はまちがいにいく行われていた。なお、かつては、この段階では郡司Ⅱ郷司の場合が存し、郡司（大領）は郷司の集合体であると言われていたが、郡司補任に伴って高田郡の各郷の郷司にも任命されたとする文書の多くが偽文書と考えられるので、郡司と郷司の関係には再検討を要する。錦織氏によると、頼方は三田郷司職を有したことは確実で、風早郷司職も保持した可能性があるが、頼成以下は両郷司職に就いていた徴証はなく、それらは頼方から頼成以外の子息に譲られた蓋然性が高いとされており、郡司の相承と郷司は別個であったと見てよいと思われる。⁽⁹⁾補任形式からいっても、大領（郡司）は太政官符による任用が維持されていたのである。⁽¹⁰⁾

②郡司相承の次第については、守遠から頼方への継承に関して、「件畠先祖相伝之所領也。而故守遠宿祢、無指子息之間、死去之後、方々牢籠、然而頼方為彼末葉之上、以譜代之理、令執行郡務之處、蓋領知彼所領畠乎。抑前郡司頼如不治第一也、或以相伝郡司所知、沽与他人、或朝来暮往之氏、以郡司所領地、沽却所住百姓、甚不知其理者」という事情が記されており（平一一三一・補二七七）、ARNESEN氏・錦織氏は、守遠を「守遠宿祢」と称しており、朝臣を名乗る藤原氏とはカバネが異なること、藤原朝臣頼方以前には凡宿祢姓の者が郡司として散見することから、藤原氏による相承という従来の見方を否定し、凡氏から藤原氏への展開があったことを明らかにしている。名前の面でも、守遠までは

「守」を通字としているので、「頼」を通字とする頼如・頼方等の藤原氏との間には何らかの断絶を認めるべきであろう。とすると、守仲・守満を藤原姓とする文書は自ずと偽文書ということになるが、成孝から源頼信への所領譲与が養子関係によると記されており（平三四六二・新出四〇）、上掲の守遠・頼方の相承も何らかの合理的理由が想定できそうであるから、相承の次第を考える上では依拠し得る史料と評価して、検討を試みることにしたい。

③凡宿祢氏は安芸国造凡直の系譜を引く高田郡の譜第郡領氏族であったと考えられる。⁽¹¹⁾とすると、前節で整理した十・十一世紀の譜第郡司氏族の者の様々な転身とともに、前節で触れた事例の中にも見られたが、十一世紀以降の段階においても譜第郡司が存続していた例を見出すことができ、譜第郡司氏族の動向を考える上で興味深い知見を呈することになる。なお、郡司が藤原氏になってから後も、凡氏は国書生として活躍しており（平一一二六・一三四〇・二二〇三、徴古二四・二六など）、譜第郡司から在庁官人への転身、国衙への進出を試みているのであって、凡氏の勢威が失墜した訳ではないことは、前節での検討とも合致している。ちなみに、藤原氏については、頼方の「大掾」の肩書（平一〇八四）が信頼できるとすれば、国衙官人から郡司への転身を図ったことになり、この時期の在地有力者の複雑な動向の一例とすることができよう。平一〇五九・一一〇九・一一一三・一一一七・一三八九の播磨国赤穂郡の郡司秦為辰の場合は、譜第郡領秦造氏の系譜を引く者であったが、肩書は大掾であり、久富保内の荒井溝修理に際して郡内人夫を徴発するために一時郡司を帯していた（平一一〇九・一一一三）。そして、その後

は「久富保公文職并重次名地主職」を「開発之私領也」と主張するに至っている(平一三八九)。とすると、「大掾」藤原氏が高田郡司職相承を企図したのも、こうした郡司としての権限や所領開発・集積と関わっていることと考えられてくる。

④この時期の郡司の役割としては、表3によると、依然として郡司が売券の証判を与えていることが知られる。そして、徴税を請負う存在としての活動にも注意される。坂上氏は、長治三年二月十九日丹治近恒田畠売券(徴古六一)の「件田畠、自元往古公民所領也、而勤仕公文預職之間、年々負累物代立券領知顯然也。且被停止公文預、且依爲郡司所領、本券相共、副新券、所注渡進如件」という近恒から郡司藤原頼成への所領移動について、三田・風早郷下で藤原氏の領知地域が拡大したことを背景に、以後両郷の徴税活動に関しては郡司藤原氏が権限と責任を持つ体制が出来上り、所領として認可されたという事情が存したことを示すと解された。十世紀の郡司が徴税請負責任を持たなかったのに対して、十一世紀の郡司は在庁官人等と一緒に負累物代の所領を没収したり、結解を作成したりする徴税活動を梃子に所領集積Ⅱ在庁別名成立を実現し、国衙領の徴税を請負う存在となり、国衙支配の一端を担うようになるというのである。但し、郡司藤原氏の「郡司所領」には紆余曲折があり、「不治第一」と非難される頼如と頼方との相争(②前掲史料)、錦織氏が指摘される頼成の二度に亘る郡司任用の背景としての弟との相論(平二四一〇「頼成二箇度給官符、与舍弟有相論之故也」)、またARNISEN氏が言及される周辺地域の荘園化との競合など、様々な要素を考慮しておく必要がある。錦織氏によると、成孝は郡司であつた徴証はないが、

「所領田畠・栗林・杣山等、従先祖守仲之時、至于親父頼成、爲高田郡七郷大領之職、次第相承所令領知也」(平二四一〇)と主張し得たのは、やはり高田郡司藤原氏の所領について権限を有していたと考えられ、源頼信・頼綱が三田・栗屋郷の万雑公事を勤仕した(平補一三二)のは郡司の職務と関わりがあるとされており、成孝・頼信・頼綱らも郡司であつた可能性があると述べられている。「相伝所知」・「郡司所領」の語は守遠・頼方の相承時にも見えており、この時期に所領相承と郡司相承が一体となる形が成立したと解することができよう。

以上、安芸国高田郡の事例により、一員郡司制下の郡司の動向やその役割・活動の一端をかいまみた。では、こうした郡司のあり方は他の郡の場合にも該当するのであろうか。郡司氏族の動向や相承次第がわかる例はないが、郡司の役割・活動については多くの史料が存するので、それらを整理して一員郡司の役割をまとめることにしたい。まず売券・紛失状などに対する郡判については、郡判を据えた売券そのものが稀になつてきている(表3)ので、当代の実質ある職務と見なすことには疑問も呈されているが、郡司・在地刀祢証判のものは十一世紀後半く十二世紀にも存しており、こうした行為が郡司の役割であつたことは認めてよいと考える。次に前章で指摘した国使―郡司関係に基づく役割として、土地の立券、四至・坪付の言上、妨領停止や帰属に関する証言を国使とともに励行すること、官物・臨時雑役等租税免除の実施や租税・労役等の徴収・進上への関与などの徴税関係の行為が掲げられる。これらの活動は基本的には現地の郡司が中心となつて実行されるが、強制執行を伴う場合には国使―郡司関係に期待されるところが大きかつた(平七〇四

・二〇〇〇など)のは前代と同様であった。また治安維持の面においては、郡司の活動が期待され、武力を発動する場合も存する(『本朝世紀』久安二年四月二十五日条、平五二七・三四三二・三五三五など)が、「雖不知子細、加郡判了」・「(檢非違使が)請在地郡司証判進上」(平四九五・五二〇)と、郡司は事件の報告あるいは報告書に署判するだけで、治安維持のための強制力を發揮できていない場合が散見するのも特色である。

一方、「郡司等参上、定無其勤、事在農節、從輕法可給暇」(『小右記』治安三年正月二十六日条)に窺われる勸農への関与、駅・駅路の管理(同長和元年八月十七日条、『帥記』承保元年六月二十九日条)など、前章でも触れた在地機能の維持に関わる事項では、郡司の役割は大きかった。その前提として、国使―郡司関係によって任務が遂行される際にも、四至言上や犯人言上、在地の先例の申上(『太神宮雜事記』長和二年九月条、康平二年三月十九日条、平四六二・一〇四〇・一三五三・二五四一・三〇九三)などを行う、在地の情報・情勢に通じた存在としての郡司のあり方があったのである。

以上の整理によれば、一員郡司の役割や存在形態は基本的なところでは十世紀の雑色人郡司と同様であったように思われる。では、一員郡司制の段階での特色は全く抽出できないのであろうか。先学も既に指摘されている事柄であるが、私は少なくとも次の二つの点で大きな変化が生じていると考える。まず郡司領の存在である。「郡司領」は康治二年七月十六日尾張国安食莊立券文(平二五一七)、久安六年十月二十二日伊勢国志貴厨内檢帳(平二七一)、仁安元年飛騨国雜物進未注進狀(平

三四一〇・三四一一)や建久年間の大田文にも散見しており、「郡司則佐所領給廿七町八反百八十歩」(天喜四年三月二十一日伊賀国黒田莊工夫等解(平七八一))、「可為郡司名田」(仁平元年四月八日常陸国留守所下文(平二七二七))や下総国相馬郡司平氏(平二五八六)・大隅国贈於郡司(平三二二〇・三二三〇)・薩摩国牛屎郡司(平三七〇五)の例などから考えて、④で触れたように、郡司職とともに代々相承すべき所領を有し、徴税責任を請負う形の郡司の存在形態と不可分のものと言える。『古事談』(十三世紀初めの成立)第三僧行の中の伊賀国で「郡司不慮蒙国勘被追却國中」時、「相伝之所領・所従モ有其数、惣打棄テ赴人国」とあるのは、そのような郡司の位置づけを描いていると思われる、また久安五年五月六日東大寺僧覚仁・伊賀国目代中原利宗問注記案(平二六四四)に「郡郷官物結解作法ハ郡司・郷司・加納田司等、先作結解テ付税所」と見えるのは、郡司の徴税面での役割を窺わせる文言であろう。

ところで、河音能平氏は、九世紀初成立の『日本靈異記』と十二世紀前半成立の『今昔物語』の同じ話、特に『日本靈異記』中巻第三十四話と『今昔物語』第二十六卷第八話とを対比して、前者では「多く饒にして財に富み、数屋倉を作り」と表現されている部分が、後者では「其ノ郡ノ郡司有ケリ」と全く異なった表現になっている、後者では財宝の中から「馬牛」なくなるとともに、前者の「奴婢」が「仕ケル従者共」という主従関係の下に身分的に隷属する者に変化している、その財産形態の主要なものが前者の屋倉に一ぱいつまっていた稲などの動産から、後者では「領シケル田畠」・「知ル所」といった土地Ⅱ不動産に変化している、といった興味深い様相を指摘されている。即ちそこに地方豪族は明

確に従者（下人・所従）を従え、郡司職を帯びた在地領主として登場するという変化相を読み取るうのである。先掲の郡司の土地認定行為に関連して、郡司が庄官を兼帯し、他の庄園への妨領を行うことがしばしば非難されており（平二四六九・二五八六・三七二一など）、保元二年三月十七日太政官符（保元新制、平二八七六）にも「以在庁官人・郡司・百姓、補庄官定寄人、恣募名田、遁避課役、郡県之滅亡、乃貢之擁怠、職而此由」ことが問題視されている。また安芸国高田郡司については、成孝の代に所領を寄進して庄園化と下司職保持を企図して失敗したのは周知の通りであり、その他郡司が所領寄進によって下司職保持を行っていた例はいくつか見られる（下総国相馬郡〔平二二七六〕、播磨国赤穂郡〔平一三八九〕など）。このような在地領主化を企図する郡司のあり方を象徴するのが郡司領の出現であったとまとめることができる。

次に「在地」の位置づけがある。大宝律令で成立した郡司の性格に関しては、官人的諸規定上の「旧守性」や非律令的性格に注目した見解や共同体農民の保護者たるの側面を描く立場に対して、その官人的性格、被支配者層に対する収奪者としての側面を看過してはならないとする批判があり、郡司の性格には二面性が存した。大局的に見て、在地首長制論が指摘するように、律令制下の地方支配が実質的な面で在地豪族たる郡司に多くを依存していたのはまちがいないが、郡司は国郡里（郷）制による地方支配の中で、国司―郡司―里長（郷長）―在地という位置づけで、在地社会の支配に臨む存在であったと考えられる。ところが、十一世紀以降、「在郡司」・「在地郡司」の表現が顕著に見られ、「検田所

并在郡司」（平七二二）、「国使并在地郡司・刀口」（平補七）、「国使惣判官代津守永行并在地郡司・刀称等」（平補三七）などあるので、国使、在庁官人は「在地」には含まれず、国使―在地／郡司―刀称という関係であったことがわかる。先述のように、この時期の郡司は在地情勢・先例に通曉した存在としての役割が想定され、「郡司・刀称等者爲国衙之進止、検田・検畠之時、以彼等爲図師致沙汰」（平二五四一）と、国衙の国務遂行に協力すべき現地の者として位置づけられるに至っていると言えよう。

ちなみに、八世紀の『万葉集』では畿外全体が「天離る夷」と認識されていたが、越中守大伴家持は郡司等との宴席で「しなざかる、越の君らと、かくしこそ、柳かづらき、楽しく遊ばめ」（卷十八・四〇七一）と詠み、「越の君」と一定の敬意を表しており、また家持が任を終えて帰京する際に、射水郡大領安努君広島が饒饌之宴を設ける（卷十九・四二五一題詞）、上総国大掾大原真人今城が朝集使として上京する時に「郡司妻女等」が饒歌を贈る（卷二十一・四四四〇・四四四一題詞）という具合に、ともに地方支配を担う「同僚」としての共感も存したのではないかと考えられる。一方、説話文学の史料ではあるが、十一世紀頃の郡司に関しては「田舎人」・「下賤」・「無下」とする意識が散見する（『今昔物語』卷十六第八話、卷二十二第七話、卷二十四第五十五話、卷二十八第七話など）。さらに前引の『古事談』第三の他にも、「可成キ官物、其負有リ、此ハ其ノ代ニ我レ取テム」と、国司により仏会の料物を取り上げられる（『今昔物語』卷二十第三十六話）、「郡ノ司四度ケ無キ事共有ケレバ、速ニ召シニ遣テ誠メム」（卷二十四第五十五話）とい

うように、国司の追求を受け、国司の前には全く無力の存在として描かれている例がある。そこにはかつての「君」としての権威や国司の「同僚」として地方支配を担うという気概の片鱗すら窺うことはできない。

このような郡司のあり方は、国司（国使）―在地／郡司―刀祢という関係の中で、郡司の置かれていた立場を反映したものと見ることができるところではあるまいか。

以上、本節では一員郡司制下の郡司のあり方やその役割などを検討し、郡司領の出現や「在地」としての郡司の位置づけに、一員化とともに、郡司の大きな変化があったのではないかと考えた。これが中世的な郡司の姿と言えるか否かは、鎌倉時代（以降）の史料の分析が必要であり、この点は今後の課題とすることにした⁽³⁷⁾。

むすびにかえて

本稿では九世紀前半の律令国家の郡司任用方法の確定以降、郡司制度がどのような変化を遂げるのかという関心から、主に十世紀の雑色人郡司、十一世紀以降の一員郡司制のあり方を検討した。郡司の変容の点では、譜第郡領氏族の動向、郡司職の相承と郡司領の成立、「在地司」としての位置づけ、また郡司任用の儀式の消滅などから見て、九世紀後半～十世紀の雑色人郡司登場よりは、十世紀末～十一世紀の一員郡司制への移行の方が大きな画期であったと考えられる。別稿で考究したように、時あたかも在庁官人制の成立時期であり、この時期こそ国郡衙機構の変動期であったと評価できよう。

もとより本稿は郡司制度を軸に論じたものであり、社会経済史的視点は捨象されている⁽³⁸⁾。また郷司制との関係や刀祢等在地の動向についても今後の課題とせねばならない。郡司より下の階層についてはやはり八世紀以来の郡司の支配の実態を検討する中で、通時的に追求する必要があると考えており、国郡衙機構のあり方を分析する上で必要な国司の位置づけや鎌倉期の国郡衙・在庁官人の変遷の様子の考察とともに、後考に俟つことにし、無雑な稿を擱筆することにした⁽³⁹⁾。

注

(37) 郡司任用者の一覧表は私も独自のものを作成している（『古代日本における郡司制度とその実態的変遷に関する研究（平成八年度～平成九年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書）』（一九九八年）「郡司表（稿）」）が、掲載の余裕がないので、ここでは現在流布してものでは最も詳しい米田雄介「郡司一覧」（『日本史総覧』補巻中世三・近世三、新人物往来社、一九八四年）に依拠することにし、適宜知見を補うものとした⁽⁴⁰⁾。

(38) 竹内理三「在庁官人の武士化」（『律令制と貴族政権』Ⅱ、お茶の水書房、一九五七年）でも、国衙による郡務吸収という視点からではあるが、在庁官人の出自には郡司家出身の者が多かったことが指摘されている。

(39) 拙稿「額田部氏の研究」（『国立歴史民俗博物館研究報告』掲載予定）。

(40) 賀陽氏が譜第郡司であることは、藤井駿「加夜国造の系譜と加陽氏

について」(『岡山大学法文学部学術研究紀要』二、一九五三年) 参照。

(41) 正倉院古裂銘に「」司大領外従八位上播磨「」と見え、播磨直(宿祢)氏が飾磨郡の郡領であったことがわかる。但し、この史料については「」河内介従五位上大養宿祢古万呂」とあるのは不審で、調庸布であれば、国名は記さず、「国司介某」の如き記載が一般的である。郡司の氏姓と松嶋順正編『正倉院宝物銘文集成』(古川弘文館、一九七八年)がこの断片を播磨国に配していることによって、とりあえず飾磨郡と解しておく。

(42) 注(22) 拙稿参照。

(43) 注(6) 拙稿参照。

(44) 坂本賞三『莊園制成立と王朝国家』(塙書房、一九八五年) 第三章など参照。

(45) 山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』(塙書房、一九九四年)。

(46) 注(22) 拙稿参照。

(47) 山田渉「安芸国高田郡司とその所領寄進」(『史学雑誌』九〇の一、一九八一年)、坂上康俊「安芸国高田郡司藤原氏の所領集積と伝領」(『史学雑誌』九一の九、一九八二年)、長沢洋「高田郡司関係文書の原形と伝来についての覚書」(『広島県立文書館紀要』一、一九八九年)・PETER J. ARNESEN「The Struggle for Lordship in Late Heian Japan: The Case of Aki」(『THE JOURNAL OF JAPANESE STUDIES』vol. 10, No. 1、一九八四年)、錦織注(9) a・c 論文など。なお、山田氏は成孝段階での偽文書作成、錦織氏は頼方と頼如との争いでの頼方、頼成と弟との争いでの頼成による偽文書作成、特に頼成による偽文書

作成を想定している。ちなみに、最近の研究として、吉村晃一「安芸国高田郡司藤原氏についての一考察」(『史学研究』二二五、一九九七年)のように、以上の偽文書論を否定する立場に立つものも存する。その他、偽文書論をさらに進めた明石一紀「安芸国高田郡司関係史料と中原氏」(『民衆史研究』五一、一九九六年)も呈されている。

(48) 松岡、鈴木注(2) 論文など。

(49) 錦織注(9) a 論文。

(50) 泉谷康夫「平安時代の諸国検断について」(『日本中世社会成立史の研究』高科書店、一九九二年)、注(22) 拙稿参照。

(51) 八木充「国造制の構造」(『岩波講座日本歴史』二、岩波書店、一九七五年)。なお、偽文書論を否定する吉村注(47) 論文も、凡直が藤原氏に改姓したと見ており、凡直氏が譜第郡領であったと考える点では一致する。

(52) その後の安芸国の動向については、近年の研究として、角重始「安芸国における莊園公領制の形成」(『日本史研究』二七五、一九八五年)、「源平争乱前後の安芸国」(『日本歴史』五三五、一九九二年)、錦織注(9) c 論文などを参照。

(53) 錦織注(9) a 論文。

(54) 森田注(4) 論文。吉村注(47) 論文でも、十一世紀中葉の郡郷制改編により、官物請負能力が必要とされ、郡司・郷司の変化が存したことを述べられている。

(55) 高田実「平安末期「領主制」研究の一視点」(『歴史学研究』二二三、一九五九年) 参照。

(56) ①に整理したように、郡司と郷司は別個の存在であると考えるが、

郷司制については十分な私見を持つに至っていない。旧来の郷司の理解に立つ立場でこの時期の郡・郷の関係を説明したものとしては、坂本注(44) 書一五九頁〜二〇〇頁を参照。

(57) 河音能平「日本霊異記から今昔物語へ」(『日本古典文学大系月報』(日本霊異記)、一九六七年)。

(58) 坂本太郎「郡司の非律令的性質」(『歴史地理』五三の一、一九二九年)、宮城栄昌「郡の成立並に郡司対農民関係の強化」(『史潮』六の二、一九三六年) など。

(59) 北山茂夫「大宝二年の筑前国戸籍残簡について」(『歴史学研究』七の二、一九三七年)。

(60) 米田雄介『郡司の研究』(法大出版局、一九七六年)、大町健『日本古代の国家と在地首长制』(校倉書房、一九八七年) など参照。

(61) 石母田正『日本の古代国家』(岩波書店、一九七〇年) 第四章など。

(62) 田村憲美「十・十一世紀大和国における国衙領支配と興福寺」

(『古文書研究』一九、一九八二年)、関幸彦「在国司職」成立の諸前提」(『国衙機構の研究』吉川弘文館、一九八四年)、中込律子「王朝国家期における国衙国内支配の構造と特質」(『学習院史学』二三、一九八五年) など。なお、梅村喬「在地所司について」(『古代文化』四八の一、一九九六年) に「在地所司」の用例が集められているが、「在地郡司」についての言及は殆ど行われていない。

(63) 大津透「万葉人の歴史空間」(『律令国家支配構造の研究』岩波書店、一九九三年)。

(64) 今谷明「鎌倉・室町幕府と国郡の機構」(『日本の社会史』三、岩波書店、一九八七年) が大まかな概観を行っているので、とりあえず

それを参照したい。

(65) その他、下向井龍彦「国衙と武士」(『岩波講座日本通史』六、岩波書店、一九九五年) が整理している武士の成立過程の中で郡司や国郡機構のあり方を考えるという視角も考慮せねばならない。

(もり・きみゆき 高知大学人文学部助教授)